

## 第7回館長講座 「イギリスの博物館」

司会：こんにちは。定刻となりましたので、第7回の館長講座を始めさせていただきます。  
…本日は、「イギリスの博物館」と題しまして、当館の鷹野館長よりお話をいただきます。  
では、よろしくお願いします。

(拍手)

館長：皆さん、こんにちは。今日は「ヨーロッパの博物館」というテーマですが、今回はイギリスのことを取り上げます。ただ、イギリスの博物館といとも、私そんなにたくさん見ているわけではないので、行ったことのある、聞いたことのある、見て来たことのある博物館を取り上げながら、紹介することに致します。

イギリスで博物館が始まる頃というのは大きく二つの流れがありました。  
一つは個人のコレクションが博物館へと発展していくもの、それからもう一つは万国博覧会がもとになって博物館ができた、というものがあります。

まず、個人のコレクションがもとになってできた博物館ですが、背景には15世紀半ばぐらいから17世紀半ばぐらいまでの大航海時代を経まして、ヨーロッパ諸国が世界各地への積極的な植民活動が続けていきます。

その中で、個人のコレクションとか、あるいは王侯貴族たちのコレクションも作られていきます。ただ、コレクションが出来ていっても、多くの場合コレクターである人が死んでしまった後ですね、遺族が無理解であったり、あるいは遺産相続を巡ってのごたごたの中で大部分が四散していくというものが多かったのですが、中には公開されて、博物館の資料となっていったものがあります。

そうしたもののうちで、代表的なものを二つあげます。

一つはイギリス人の旅行家で、探検家でもあったジョン・トラDESCANT (John Tradescant) という人。この人は親子2代にわたって非常に熱心な博物学資料のコレクターでした。博物学というのは何でもかんでも含む学というか、いろいろなもの集めるコレクターだったわけです。

そのトラDESCANTのコレクションの大部分が、トラDESCANTの友人である、またそ

して自分自身も非常に熱心なコレクターであったエリアス・アシュモール(Elias Ashmole)という人に譲られます。

アシュモールは自分自身の資料も加えて、全部の資料を 1677 年にイギリスのオックスフォード大学に寄付を致します。寄付を受けたオックスフォード大学ではこのコレクションを 1683 年に「アシュモレアン博物館 (Ashmolean Museum of Oxford Univ.)」として一般公開をしました。

アシュモールの寄贈した資料は先程のトラデスカント以来ですので、どちらかという自然史に関するものが多かったのですが、オックスフォード大学では、この「アシュモレアン博物館」を大学の科学研究と教育の中心の場として活用しまして、約 150 年間ほどにわたって、重要な役割を果たしてきました。

この「アシュモレアン博物館」というのは、イギリスで最古の博物館で、それと同時に、世界で最初の、誰でも利用が出来る公共博物館でした。

また、もう一つ、世界で最初の大学博物館というものになります。そしてまた、週 6 日、無料で公開する、誰でも利用できる、という原則ですね。地域のあるいは国民の、あるいはまた、国際的にもより多くの観客が集まる場になっています。

最近では 1 年間に 25 万人の利用者があった、ということです。当館が 15 万人でしたので、ここには負けちゃって、まあ、しょうがないですね。

ここには私自身、2 度足を運びました。2 度というのは、二日続けて、なんです。お恥ずかしい話、ついうっかり月曜日というのを忘れてしましまして、月曜日に行ってしまったら閉まっている。そのまま引き下がるのも何なので、たまたま次の日もうまく空けられましたので、火曜日にでかけて行とみました。外国なんかに行ったりしていますと、つい、曜日の観念を忘れてしまうということがありまして、毎日、日曜みたいな感じで行動してしまうとことがよくありますが、その例でした。

ただ、この時には建物全体が修復中ということでした。

さっきお話ししましたように、もともとあった資料はアシュモールとトラデスカントの探検の産物による資料ですから、自然史関係の資料が多いただろうということを想像していたのですが、ところが行って見たら絵画もたくさんありまして、これもヨーロッパ絵画で、ルネサンス文化の頃のものもありました。

あとは家具だとか楽器の類、というのが非常に目立ちました。ただ、先程言いましたように私が訪れたときは建物が修復中でしたので、トラデスカントのお宝というのは残念ながら修復中で見られませんでした。その代り、この博物館の貴重資料というのでしょうか、奥の方にトレジャーという言葉がありますが、まあ、宝物ですね。この博物館のお宝なん

かをまとめて展示した部屋がありました。

その中に仏像もありますし、それから陶磁器のコーナーには、日本の縄紋土器、縄紋時代の中期半ばくらいでしょうか、その頃の土器が、デンとありました。

それからまた、絵画を前にして子どもたちが説明を受けているところをみました。小学校の低学年くらいでしょうか。小さい時からこうやと連れられて来て、エドゥケーターという人が出て来て、説明もしているという場面を見たわけです。

これから、もう一つ個人のコレクションから博物館へという例をあげます。それは「大英博物館<sup>ブリティッシュ ミュージアム</sup>British Museum」で、この博物館は、<sup>サー</sup> Hans Sloane、ハンス・スローン卿という人のコレクションがもとになっています。スローンという人は珍奇なもののコレクターといわれていて、ちょっとこれでもきれいに表現したのですが、まあ、ゲテモノの収集家という評判もあったくらいで、あとでもまた出て来ますけど、いろんなものを集めるというコレクターとして非常に有名だったんですね。5万点にも及ぶコレクションだったんですが、動物・植物・鉱物の標本、それから、古代の遺物、写本・版画・絵画・貨幣、こういったもののコレクションをしていたんです。これだけ見ても、まとまんないなあ、と思いますけど、これを国へ提供しようと。どうして提供しようとなったかは次でお話しします。

大体、このコレクション形成に要した費用の4分の1という額の2万ポンドという額で、…2万ポンドというところのくらいだろう、500万円くらいですかね、今の現在の額に単純に換算すると。だから現在の額に換算するとそんな大きな額じゃないかもしれませんが、当時の額、貨幣価値が今と違う時代ですので、かなり巨額だった。このスローンの申し出を1753年にイギリス政府が国会で受けることを決める。それによって、世界で最初の国立博物館が誕生することになります。

このスローン卿のコレクションの他、コットン家のコレクションというのがあと、それから王室の図書館の寄贈品を加えて、1759年1月19日に開館しています。

もともとスローンという人は医者としての教育を受けまして、1687年に西インド諸島に渡ります。帰国時に非常に大量の自然史コレクションの資料を持ち帰って来るわけです。そして帰国してからロンドンのブルームズベリで医者として開業しまして、そこでミルクチョコレートの服用を患者さんに勧めるとかですね、何に効くのか、よく今ではよくわかりませんが、医者としての役割を果たしました。

それから、キニーネ。このマラリアの特効薬を販売して、だいぶ儲けたようです。

ロンドンに戻ってからさらにもっと、いろいろなものの収集を続けるということをして、家族からさすがに疎まれたのか、隠居しろということになってですね、非常にジメジメした環境だったそうですが、マナーハウスというのを作って隠居します。自分のコレク

ションをどうしようか、自分が死んだらどうしようかということを心配します。

自分の家族の中には同じような志をもとコレクションを作る、モノ集めをするという人はどうもないようだということで、国に寄付しようということを考えます。娘が二人いまして、その二人に1万ポンドずつ残るようにということで、2万ポンドを払ってもらふことと引き換えにこのコレクションを国に贈ろうと、寄付というか、引き取ってもらおうということを決めたわけです。

1753年の1月にこの世を去った時、彼が残したものは本当に多種多様で71,000点という数字もありますけれども、書籍・写本・版画・絵画などが50,000点、それから植物標本が337冊あった、と推定されています。

この遺産の管財人を務めたウォルポールという人が評しまして、このコレクションの中には「耳が一つだけの鮫だの、ガチョウほど大きいクモまで入っている」と皮肉を込めて書いたものが残っています。

しかしまあ、そういうゲテモノもあるにしても、これがまとまって残されたということは国民にとっては非常に得な買い物だった、ということも言えるんじゃないかと思います。

この大英博物館が発足しまして、ロンドンのブルームズベリー地区にあります建物を利用します。この建物は17世紀頃のフランスのお城の形をまねて建てられた、モンターギュという人の住宅を転用して、博物館が始まります。

発足した当初はあまり大きな博物館でもなくて、刊本部と写本部と博物部という3部から構成されていたものです。その後、多くの人が寄付をするとか、それからその博物館の職員たちが努力をしまして、収蔵資料が、次第に増加していきます。

開館後間もない頃の入館者たちは、自然史関係の人目を引くコレクションとか、それから人文的でありながらも科学的にみえるコレクションとか、そういうようなものに関心を寄せる人も多かったようです。古美術品とか民俗学関係の収集品というのはまだ、そんなに多くなくて、貧弱だったようです。

その後、資料は次第に増加していきまして、エジプト・ギリシャ・アッシリア、それからバビロンとかインド・中国などですね、各国の文化を代表するものを、各部屋ごとに展示をするようになっていきます。

主な展示品の中で、著名な資料を二つ紹介します。

一つはこのロゼッタストーンです。ロゼッタストーンという名前は、これが発見されたエジプトのデルタ地方の、ロゼッタという村の名前、現地名ではラシッドというそうですが、ロゼッタという村の名前にちなんで付けられているわけです。海から数キロ内陸に入ったところにある村です。

このロゼッタストーンの発見の経緯ですが、ナポレオンが軍隊を率いてエジプト遠征を

していたときで、ナポレオンは遠征の際には、軍隊、兵隊だけじゃなくて、学者たちも一緒に連れて行くんですね。その学者たちの手によって、古代エジプトの文明というのはだんだん見えてくるようになった。

このことがヨーロッパにおけるエジプト学の始まり、というか黎明期を迎えます。そのさなか、1799年7月半ばに発見された、とされるんですが、発見時の状況は、あまりはっきりしていません。

一説によると、地面に横たわっていた、ということなんですが、どうもそうではなくて、フランス軍の工兵隊が、後にジュリアン要塞と呼ばれることになり、要塞の拡張工事を行っていた時に、取り壊された古い土壁の中に埋もれていた、というのがどうも本当らしいということなんです。

壁の取り壊しにあたった工兵隊の指揮官たち、将校たちは、この石に書かれていた3種類の異なる碑文の重要性、それが一つの文章を異なる3つの文字で書いてあるということはすぐに理解しました。

そこで、ナポレオンがカイロに設立しましたエジプト研究所に、すぐに送られることになりました。

8月半ばにカイロにロゼッタストーンが到着すると、すぐにこの石は学者たちの深い関心を集めました。

そこでまず研究が進められるわけですが、フランス軍が発見したものなのに、なぜ今、イギリスにあるのか、ということですが、ナポレオンの軍隊は各地で侵略行為というようなことをしていたようです。最終的にナポレオンの軍隊は負けてしまうわけですが、エジプトでもイギリス軍の攻撃を受けます。

1801年の春、イギリス軍のアバクロンビー将軍の指揮する軍隊が、カイロを攻撃します。そこでカイロが危なくなってきたということで、フランス軍遠征軍に伴っている学者たちは、このロゼッタストーン、それからそれについての記録とか自分たちの研究の今までの記録などもこれをカイロから避難させようということになりました。資料・標本とか遺物、これをもって学者たち自身が、その時は、まだより安全だということで、アレキサンドリアに避難したわけです。

しかしアレキサンドリアもまた、占領されるようになってしまいます。フランス軍は、アレキサンドリアの占領協定によってロゼッタストーンなどの多くの重要な遺物をイギリス軍に引き渡さなければならなくなりました。

アレキサンドリアに送られていたロゼッタストーン自体は布でくるまれました、さらにマットで二重にくるむという大切な扱いを受けて、当時のフランス軍のヌグー将軍という人の所有物だということで倉庫に収められていました。

9月にイギリス軍のハーガース大佐という人が占領協定に従ってロゼッタストーンの引

き渡しも求めます。しかし、このヌグー将軍、ロゼッタストーンはあくまでも自分の私物であるというふうに主張しまして、この要求を拒否。非常にこじれたことになりましたが、結局、このヌグー将軍がイギリス軍の圧力に屈して、ロゼッタストーンを手放すことになりました。

フランス軍の将校とエジプト研究所の所員の手によって、イギリス側に手渡されたんですが、イギリス兵は非常に厳重に護衛をしていたのですが、その時フランス軍の将校で引き渡しに立ち合った人たちが、フランス軍の兵士たちがこのロゼッタストーンを持って行かれることに気が付かないように、気付く前に早く石をイギリス軍のもとにとかアレキサンドリアから運び出すようにという助言をしたということですね。この石の重要性ということが、フランス軍の中の兵隊に至るまで認識されていたんだということが言えるのではないかと思います。

この石を引き取ったターナ大佐は、ロゼッタストーンを手に入れますとすぐに軍艦の「レジプシエンヌ」いう船に積み込みまして、1802年の2月にイギリスのポーツマスに到着しました。3月11日にロンドンの「考古学協会」の本部に預けられまして、そこで数ヶ月かけて、協会にいる東洋学者だとかギリシャ学者たちの手で非常に綿密な調査が行われています。

自分たちだけで独占するのではなくて、「考古学協会」はこのロゼッタストーンの石膏の型を作りまして、今でいうレプリカを作ってますね、オックスフォードとかケンブリッジ、それからエジンバラなどの大学や研究所、研究施設にこの石膏型を送ってそれぞれで研究を進めてもらうということにしました。また、ギリシャ語のテキストのコピーも作って、ヨーロッパの主な大学図書館などに送ります。

そして、この年の終わり頃、つまり1802年の終わり頃、ロゼッタストーンは「考古学協会」から大英博物館に移されて一般に公開されるようになり、今日にいたるまでずっと展示されているわけです。

ロゼッタストーンには、3つの文字が刻まれています。ヒエログリフ、エジプトの聖刻文字、これは石に刻むための文字。よくエジプトのお墓の中の墓誌なんかに見られる文字ですね。それからデモティックという民衆の文字。これ筆記用の文字。それからギリシャ語がある。全部同じ内容のことを書いているんだという解釈がなされていました。

これらの比較からフランスのジャン・フランソワ・シャンポリオンが、このヒエログリフを解読したというのが、非常に有名なできごとです。私自身、小学校か中学校かどちらか忘れたんですが、教科書の中でこのシャンポリオンのことを学んだ覚えがあります。

そしてもう一つ、大英博物館の名物といってもよい、エルギン・マーブルズ。これが1816年に大英博物館の所蔵になっていきます。

このギリシャの彫刻群ですが、1799年にイギリスのトルコ駐在大使になったエルギン卿、(エルギン伯爵)という人がトルコ政府から、この頃、ギリシャはトルコの支配地になっていましたので、トルコ政府からパルテノン神殿周辺の調査の許可を得ました。「許可を得る」というのは、パルテノン神殿から地上に落ちてしまった彫刻なんかを掘り出して、そしてそれを整理する、というような許可だったはずなんですけど、これを勝手に拡大解釈をしまして、それから監視しているトルコ政府の官憲を買収しまして、地上に落ちている物だけではなく、パルテノン神殿の破風<sup>はふう</sup>やメトウーパの彫刻を取り外して、海路イギリスに送ってしまうということをしました。

1817年にこの「エルギン卿記念仮展示室」が、設計されたんですが、パルテノン神殿の彫刻を収納する為に作られたものです。

エルギン卿が所有していたパルテノン彫刻群、これを英国政府が3万5000ポンドで購入したということでした。議会がそのことを決定し、所有権がエルギン卿から大英博物館に移転されました。

「パルテノンギャラリー」にはこの彫刻がここにあることを説明するパンフレットが置かれていまして、A3くらいのパンフレットなんですけど、置かれています。苦労しているなあ、と思うんですが、その冒頭の部分には、つまり上から二つ目、この段落なんですけど、一部を訳してみました。

**What is the Parthenon?** パルテノンとは何か。そして **How did the sculptures come to London?** どうしてロンドンに来たのか? を説明をしています。

**What is the Parthenon** というのは、アテネのパルテノンは、長くて複雑な歴史をもつ建物です、と、この辺から言い訳が始まっているんですよ、もう。

ギリシャの女神アテネに奉納される寺院としてほぼ2500年前に建てられた。それは1000年の間、アテネの聖母マリアの教会、ここで一転、キリスト教の教会となった。そしてモスク、トルコは当然、イスラムですから、イスラムの寺院となった。最後に考古学的な遺跡として建物は変えられ、彫刻は何世紀にもわたって大きな被害を受けました。

アテネが1867年に包囲されて、パルテノン自体も火薬庫として使われていた時、巨大な爆発が起きて屋根を吹き飛ばして、残りの彫刻のかなりの部分を破壊しました。建物はそれ以来、ずっと遺跡となっています。実際、火薬庫として使われていたんです。それゆえに爆発もあったし、それから戦いの時には、ここが砲撃の目標にもなっていたということもありました。

だからなんだ、ということかも知れませんが、要するにそういう危険なところにあったもので、いろいろな使われ方もしちゃいたんです。現在でもギリシャからは根強い返還要求があるんですね。つまり、もともとエルギン卿が今日の観点からすれば無法なやり方で、持って行っちゃった。略奪同然の非常に無法なことだったと思うわけですけども、イギリス側はというか大英博物館自体は断じて返還要求には応えようとしません。その理

由として、今ここにみたようなパルテノンの運命があったじゃないか。

つまり、大英博物館にこれが持ってこられて所有されていたからこそ、ギリシャ文明の傑作は 21 世紀の現在まで、我々人類の共通の遺産として残っているんだ、と、そういう理屈ですね。

まあ、確かにさっきもいったように火薬庫となったり、砲撃の目標となったり、そういう事実もあったことも考えますと、ひとつの理屈として成り立つのかなって思いますが、仮に、ですよ、パルテノンがギリシャに還されるということになった時に、その影響力はものすごいでしょうね。

大英博物館は、空になっちゃうでしょうし、ルーブル美術館なんかも空になるし、他人事ではなくて、日本の国立博物館もある部分、空になることが起こり得ます。

ただ、現代の風潮としては、考古学的な遺物はもともとあるところにあるべきだ、という考え方が強いですね。

ちょっと脱線しますが、最近のイスラム過激派の I S という無法なグループの所業を見てみますと、現地にあることが、果たして本当にいいのか、ということも考えてしまう。

私はもともと現地にあるほうがいいと思うんですが、そのことを理解しない輩<sup>やから</sup>が、その土地を支配してしまうと、かとのバーミヤンの石仏もそうでしたし、それから、アッシリアのパルミアの遺跡とか、I S の支配地にある古代の世界遺産となっているような著名な遺跡が次々と壊されているという状況が、目の当たりに見られるわけですね。

現にグーグル・マップなんかでも遺跡の場所を見ますと、航空写真で見られるんですが、かつての遺跡の様子は全く見えなくて、穴が開いているだけみたいになっている状況のところがあるんだそうです。

そういう状況ですが、さっきのパンフレットの一番最後のほうで、大英博物館の立場というのが、主張されています。この大英博物館の理事会は、パルテノン彫刻が人間の文化的な業績を物語る世界的博物館としてのこの博物館の目的に必要であると主張します。

大英博物館に世界各地のものがあと、これは世界各地というか、今でいうとグローバルというか、地球の我々の文化そのものが、そこに集められているんだという観点ですね。

ここでは、古代の世界（特にエジプト、アッシリア、ペルシャとリュキア）、…リュキアというのはトルコの南のほうです。その他の大きな文明とギリシャの文化的な関連を明らかに見られることができ、そして、ヨーロッパ、アジアとアフリカの文化的な発展に古代ギリシャが不可欠な貢献をしたことを追認でき、理解することができます、と説明しています。つまり、ここにパルテノンの彫刻も含めて世界各地の文化的な遺産が集まっているからこそ、一望にして、世界の文化の関連性というのを見ることができるし、居ながらにして体験できるんだ、という主張ですね。



エルギンマーブルズです。破風の部分の彫刻で首が無くなっているのがちょっと残念ですけれども、ひとつひとつの衣の様子だとか、それから肉体の躍動感とか、確かに見事な彫刻です。それからメトウパの彫刻が並んでいますが、細かいものです。

ちなみにこのパルテノンの彫刻というのは、「大英博物館」だけにあるのかというところではありませんで、「ルーブル美術館」にもあります。量は少ないですけれども。その他、どこだったかな、さっきのパンフレットの中に、ヨーロッパのいろんなところにあるよ、大英博物館だけじゃないぞ、と、これも言い訳のようにして示しています。

大英博物館のガイドブックからの地図なんですけど、グランドフロアと日本でいうと1階ですね。真ん中の丸いところ、抜けているところ、ここはミーティングルームと書いてありますが、「大英図書館」の閲覧室になっていたところですね。現在の「大英図書館」はこの場所から離れて別の場所にできていますので、閲覧室の場所だけ、残っています。ここには日本の<sup>みなかたくまぐす</sup>南方熊楠が勉強していた机があったり、マルクスが調べていたところというような歴史的な場所でもあります。それからこのまわりの灰色の部分、ここは吹き抜けの空間になっていました。ここには、カフェがあったり、ショップがあったりですね、それからこっちのほうにも、ガイド、案内所があります。ボランティアが集まる場所もあります。

このところ、18と書いてあります。ここが「パルテノン・ギャラリー」。それから、さっきのロゼッタストーンは、確かここだったと思うんですけど、この黄色いところにあります。この紫色のところはアメリカとメキシコ、それからこの黄色いところ、これは古代エジプトの資料の展示室。この色のところが古代ギリシャの資料の展示場所。それから、オレンジ色のこれがアジアですね。この67番がコリアンアジア、朝鮮半島の。それから紫色のところが中東の部屋。この1番のところには前もお話ししました、日本製の人魚のミイラは、ここにありました。それからこの2番はチェンジングミュージアムということで、後で紹介しますが、日本のものがちょっとあります。

次のアップパーフロア2階ですね、この概略ですが、61~66、これは黄色ですので、古代エジプトです。ミイラの棺なんかもあるところ。それから69~73、これは下の色と同じで、古代のギリシャ・ローマのところ。それから、鶯色のところ、これはヨーロッパの資料。それから紫色は中東の。この上のオレンジ色のところ、ここは日本のギャラリーです。「ザ・三菱コーポレーションギャラリー」となっています。

それでこれは失敗談なんですけど、私自身が初めて「大英博物館」を訪れたのが、2006年の9月でして、余談ですが、それまで大学で学生たちに講義をするのに、ヨーロッパの博物館はこうだよ、ああだよ、なんてことを話してきたのですが、それまで見もせず話してしまっていて、こうしてやっと見られたので、よかったんですけども、初めて訪れたとき、

Japan という表示がありましたので、矢印に従って階段を上がって行きましたが、残念ながらジャパンの部屋はあったんですが、扉は閉じられたままでした。

ですが、この時の2006年9月には、先程の「チェンジングミュージアム」というところに、日本の資料の展示がありました。ここは、その時その時の特別展みたいなのところがあるんですね、ちょっとしたお宝を集める、というようなところ。ちょうど私が行ったときには、日本の資料がありました。全部じゃないですけども。

その説明です。ジャパン、紀元前3000年から現在まで、ということで、ここに多くのさまざまな日本関係の資料があり、過去250年にわたって収集されてきたもので、紀元前3000年から現在に至るものが、このコーナーに示されております。それで、この説明文の下の方に、長期的な視野での博物館全体の展示室の改修のために92~94という部屋は、今年の後半に開く予定、とあります。惜しかったんです。9月でしたから、もうちょっと後ならば、という。

先程の十字型の部屋のまわりに、ケースの中に日本関係の資料がおかれていて、順番に並べられているとか、そういうことではなく代表的なものを選んで並べるという形がありました。

真ん中に埴輪がありますし、それから浮世絵だったり、陶磁器、陶器であったり、それから百万塔<sup>ひやくまんとう</sup>、紙の、世界最古の印刷物である「陀羅尼経」<sup>だらにきょう</sup>を納めていたもの。それから土器、それから能面、こういうふうの一つ一つ置かれている。美術館的な展示ですかね。

翌年もロンドンに行くことができて、さて、「日本ギャラリー」は開いているはずだと、出来上がっているはずの日本の部屋を求めて行きました。

部屋にたどり着きました。しかし、ですね、無情にもここにこういう張り紙がありまして、重要なメンテナンス作業の為に、2007年8月8日から10月9日まで閉室している、というんです。10月8日に行きました。残念ながらこの時はすぐにロンドンを離れなくちゃいけなかったんで、行けませんでした。

でも、…でも安心してください、と今はやりの言葉ですけども(笑)、行けました。3度目の正直で2012年の2月によく入れました。日本、古代から現代までの文化財、ちゃんと日本語でも書かれています。

「日本では伝統文化の多くを大切に守りながら、高度な科学技術に代表される社会を発展させてきました。このギャラリーでは日本がどのように伝統を保ちながら時代の変化にも対応しつつ、現在にいたるまでの文化を形成して来たのかをたどります。そしてその過程において、外の世界とどのように関わって来たのかを紹介しています。」

と書かれていました。

展示室は細長い 3 つの部屋がつながっているわけですが、日本の資料が、丁寧に並べられていました。

古いほうから新しくなっていくという方向だったかな。武人埴輪があります。それから古いところで土偶の展示がありまして、土偶が展示されているのはいいんですけども、その下にこれがありました。「土偶ファミリー」という漫画も登場していました。多分、今の日本の社会での土偶の扱われ方みたいなことを表現したかったのかと思うんですけども、「土偶ファミリー」の漫画があるのが面白いですね。

それから石棒とか、これは青竜刀型石器というんですね。なんでそんな名前付けたのかわからないんですけども、要するに中国の昔の海賊が持っていた青竜刀という刀があります。それみたいだ、というので、この名がついてます。

土偶ですが、必ずしも日本の縄文文化を代表する土偶とは言えないですね。この左側の方は立っているから、多分、縄文時代の後期始めくらいの土偶でしょうし、こちらは縄文時代の晩期の最後の頃の土偶だと思うんですけども、しかしまあ、土偶というものを展示して、漫画でもって日本文化の中の位置付けを見せようとした、といえるのでしょうか。

それから弥生時代の銅鐸、青銅の剣、石剣、石の剣でこれもあります。弥生時代の土器もありますが、結構代表的なものです。銅鐸でいいますとこれとこれ比べると、こっちのほうが古く、こっちのほうが末期の銅鐸と区別できます。

それからちょっとびっくりしたのですが、鏡が二面展示されていまして、これ見ますと宮地嶽というところの近くの「宮地嶽古墳」というところからのものである、と。福岡県にある古墳ですが、「宮地嶽古墳」の出土資料というのは、九州国立博物館で展示されていたんですけども、こちらは国宝なんですね。多分、日本にあれば一緒に国宝になっているようなものなんだろうと思うのですが、そのくらいものがあります。ついでに言いますとこれは Given by Prof. Umehara Sueji とありまして、非常に著名な考古学者、京都大学の考古学者の梅原末治教授が大英博物館に寄贈したということですね。

それから中世以外で、武具とか武士の甲冑とか剣とか、きれいに整えます。これは「朝鮮通信使絵巻」で、1748（寛延元）年のものという説明があります。

それから、「根付け」の展示です。根付けは最近、外国でも重要視されていますし、それから亡くなられた高田宮様でしたか、非常に熱心な根付けのコレクターだったんですね。

これは、説明ではこの人は、チャイニーズ・オフィシャルですね。それから、オランダ人と雄鶏。これはアイヌウーマン、アイヌの女性。アイヌチャイルド、アイヌの女性と女性の根付け、これはモンキートレーナー・アンド・モンキー。猿の調教師と猿。これはおかめがお風呂に入っている。最後にこれは、横たわっている裸の中国人女性ですね。なん

で中国なのかよく分からないんですが、根付けは日本のものとして展示されています。

それから明治時代。これは明治天皇ファミリーの絵で、明治時代というのを見せています。1868年から1912年、という展示がされていました。

それから戦争についてのところがありまして、これは潜水艦の出撃の写真だとか、それから兵隊の出征の様子の写真などが展示されています。

時代が新しくなると、どうしても紙資料が、紙による展示というかこれはどこでも仕方がないと思うんですけども、ここにはアイヌの衣装などもあります。

1970年代は「鉄腕アトム」とウランちゃん。ちなみに、鉄腕アトムは、あちらではアストロボーイで、ウランちゃんはというと、アストロガールとなっています。

先程も言いましたようにこれは三菱のギャラリーだということですね。

「大英博物館」というと入館料無料だというのが有名なことですが、今まで無料で来ました。ただ、1974年の3か月間だけ有料だったことがあるんですけども、無料が原則です。最初から無料で来ているわけですが、しかし無料にすることに非常に恐れを抱いていたところがあったようで、設立当初の理事会では、管理側ではですね、国会の指示に従って市民の入館を認める、そういう方針と、それからまた当時のロンドンの群衆というのが厄介だと、厄介ごとのもとだと、そういうような認識と両方あったようです。

その悩みを解決する為に、誰でも入りたい人に入ってもらっただけでも、当初、入館希望者は事前に予約してもらって、そして予約指定の時間も決めて、やって来たグループを少人数のグループにして、それを学芸員が監督しながら付き添って見せて行くという方法をとっていったようです。1810年にはこれも廃止されました。その後入館制限は、なくなっていくわけです。

19世紀の末になりますと週に7日、毎日開館する、休日でもほとんど開館するということになりました。今日では、毎年500万人もの来館者があるという、世界屈指のといいたいでしょうね、「大英博物館」になっていくわけです。

以上、「アシュモレアン博物館」と「大英博物館」と、個人のコレクションというものがもとになってできた博物館というのを紹介しました。

もう一つの大きな流れが万国博覧会との関係なんですね。1845年には博物館についての世界での最初の法律が作られます。「<sup>ミュージアム アクト オブ</sup>Museum Act of 1845」というやつですが、これは博物館というものを公費で建設ができる、つまり公立の博物館が認められるようになった。市立、ロンドン市立とかですね。<sup>おおよそ</sup>公の公立の博物館が作られることになっていきます。こ

の法律が出来ることによって、イギリスでは博物館の数が非常に増えて行く状況となります。

こういう法律が出来たことに加えて、万国博覧会ですが、1851年にロンドンのハイドパークを会場にして「第1回万国博覧会」が開かれます。

万国博覧会は、19世紀後半のヨーロッパ各地の博物館の建設、特に工芸関係あるいは科学博物館の建設の原動力となったという部分があります。この「第1回万国博覧会」では水晶宮すいしょうきゅうと呼ぶ建物が作られまして「Crystal Palace」という、ガラスで作った建物です。簡単にいうと、温室のでかいのですね。大きいガラス作るということ自体はこれ大変な産業の成果ですよ、ガラス自体はきれいに削ってありますけど大きな板ガラスにして使うということが出来るようになった。それを鉄骨で支える、そういう仕組みの場を作っていきます。水晶宮は、非常に人気を呼びまして、600万人にも及ぶ入場者があって、当時の貨幣で18万6千ポンドという莫大な純利益があったといわれます。

この「万国博覧会」の総責任者、総裁という立場でいたのが、アルバート公爵という方でした。この当時のイギリスの女王様はビクトリア女王です。ビクトリア女王のご亭主というか、連れ合い、というのでしょうか。これがアルバート公爵です。

アルバート公爵は、この純利益、莫大な利益を科学技術振興の為の施設や用地の購入などに投じようということにしまして、この万博の出品作の中から非常に優れたものも購入して、それを博物館の場に展示するということにしました。

最初にこの純利益をもとにして、「Manufacture Museum」というものが作られる。その後、収蔵品が増加していくにしたがって「Museum of Art」と名前を変え、また「Museum of Ornamental Art」と名前を変えていきました。

この「産業博物館 (Manufacture Museum)」が作られた時も、この博物館の目的というのが書かれていまして、これはあらゆる人々に美術作品を鑑賞する機会を与え、労働者の教養を高め、国内のデザイナーや製造業者に創造的刺激を与えること、という目的を掲げていました。

先程の水晶宮ですが、これはパリのエッフェル塔を見下ろすところにありますシャイウ宮にありますが、ここには博物館が3つくらいあったかな、そのひとつに「建築文化財博物館」というのがありまして、ここには主な建物の装飾品だとか、あるいは主な建物の模型など並べている展示です。ここに「Crystal Palace」の模型がありました。

それから当時の絵ですね。ちなみに「東京ディズニーランド」、東京にはない「東京ディズニーランド」ですけれども、あそこにも「クリスタルパレス」という建物がありますね。食堂になっている建物です。大体イメージはこうだったんでしょうね。

ハイドパークの万博の建物として作られた「水晶宮Crystal Palace」、これ自体は万博が終わったら撤去されました。

しかし、新たに設立されました「水晶宮カンパニー」という会社によってロンドンの南

東部にあるシドナムというところに建物が移されます。そしてこの「Crystal Palace」水晶宮は、一種のテーマパークとして活用されていました。

中に絵画が展示してあったり、動物が飼われていたりしていたところがあったり、でも一番近いのはテーマパークだということですから活用されていました。第一次世界大戦も生き延びました。

残念なことに 1936 年の 11 月 30 日の午後 6 時頃ということですが、出火しまして、中に陳列されていました彫刻・絵画、それからまた巨大なパイプオルガンが中にあったんですが、それと共に焼失してしまった、と。

それ以来、また作られることはない。「ディズニーランド」の中の「クリスタルパレス」に名前が残っているということです。

最初の「Manufacture Museum」から、「美術館 Museum of Art」になり、「装飾美術 Museum of Ornamental Art」になり、と変わっていったんですが、その最後の「装飾美術 Museum of Ornamental Art」、これは 1857 年に博物館がある場所の名前をとって、「サウス・ケンジントンミュージアム (The South Kensington Museum)」として新発足します。

この博物館は大衆の教育ということを非常に明確な目標としまして、資料を展示しているだけではなくて、学校などにこれらを貸し出したりする、今でいうと出前授業みたいなことをやってといた。それから図書を貸し出す。幻灯、と非常に古い表現ですけども、スライドですね。それから映画なんかも貸し出していた、ということです。

要するに教育的な活動とことに重きを置いたところと言えます。それから、また画期的なことに、資源の二元的な配置というのを実現しています。

これはどういうことかと言いますと、この博物館でもそうなんですが、展示室にある資料というのは、人によってたくさんある、という人もいるかも知れませんが、そんなに多くはないですね。だけど、それ以上の莫大な資料が、収蔵庫には収蔵されています。

それまでの博物館は、収蔵してある資料を全部展示室に置いてあった。ところが資料を上手く分けてですね、展示用の資料と、それから、いとみれば展示には使わないけれども研究用として使うという資料を収蔵庫に入れる。資料を展示室と収蔵庫に分けておくということにしました。そうすると、大多数が収蔵庫に入るといえるということになって、展示室にゆとりが出来る。そのゆとりを使って一般向けの教育的な配慮に基づく展示というのを考えました。

現代につながる博物館の展示方法の始まり的なところが、ここにありました。

そしてこの「South Kensington Museum」、これがさらに収蔵品を増加していくに伴いまして、科学部門のコレクションを分離して、新たに「ヴィクトリア・アンド・アルバートミュージアム (The Victoria and Albert Museum)」と改称されて、工芸品の美術館とし

で現在に至っています。ヴィクトリア・アンド・アルバートというのは、ご夫妻の名をそのまま取ったんですね。通称「<sup>ヴィアンドエー</sup>V & A」と表現していますが、20世紀全般を通じて、この「<sup>ヴィアンドエー</sup>V & A」のコレクションは、さらに拡張を続けていって、世界最大の装飾美術館へと成長しています。ヨーロッパ・北アメリカ・アジア・北アフリカなど、古代から現在までを網羅するような陶磁器・ガラス工芸・テキスタイル・ドレス・銀製品・鉄工芸品・宝飾品、それから家具・彫刻・絵画・写真など、世界に比類のないコレクションを形成しています。

一方、分離された方の科学部門のコレクションは1909年に「科学博物館 Science Museum」となって設立されまして、こちらは教育省の管轄下に置かれて、これも現在に至っています。

この「<sup>ヴィアンドエー</sup>V & A」と「Science Museum」は隣り合って建っています。

V&Aの1階のマップですが、広くてとても全部回れませんでした。ここに行ったのも、2012年の12月でした。ただ日本の展示室だけゆっくり見ましたが、それ以外はまたいつか、見に行こうと思っていますけれども、日本の展示室はここにありません。日本と書いてありますが、この一室です。

全体としますと、これだけなんですけれども、入口のところ、ここに「ザ・東芝ギャラリー・オブ・ジャパニーズ・アート」とあります。だから、これも東芝の寄付で作られたものですね。

これにも見られますように「大英博物館」の日本ギャラリーとは違ってまして、欄間を設けたりしまして、部屋の中が和風仕立ての展示室になっています。なるべく人がいなくなってから写真を撮りたいのですが、なかなか人が、どいてくれないのです。それだけものをよく見て下さっているのでしょうね。

それからこういう衣装の類ですとか、小さな陶磁器だとか、こんなのも日本にあれば多分、重要文化財等のクラスのものですね。

短刀の<sup>こしら</sup>拵えが並べてありました。これは武器としてではなくて、芸術品というか工芸品として展示されています。ここも、拵え、とか、それから、<sup>つば</sup>鏢とか、<sup>こうがい</sup>筭とか刀のパーツなどがあります。小柄とか<sup>こづか</sup>目貫とか、これらの詳細は現在当館のテーマ展示室の「杉山コレクション」のほうにアイヌの刀ですけれども、刀の展示がありますので、どうぞご覧下さい。

甲冑が並んでいます。やはりこれも、工芸品ということで、印籠や根付け、これがたくさんありました。

印籠ですね。残念ながら、三つ葉葵<sup>みつばあおい</sup>のものはありませんでしたけれども。

それから根付けが、象牙のものが並んでいます。

上の段の左から 3 つ目 4 つ目 5 つ目、これですね。説明を見ますと左が temple・ウォッチマン、…ウォッチマンと何だろう、お寺で番をしている人なんですかね。それから真ん中は、仙人・ウィズ・ピーチズ。桃を持った仙人。右側、蝦蟇<sup>がま</sup>仙人・ウィズ・ヒズ・トウド。ヒキガエルを持った蝦蟇仙人。なんですが、造形は非常に見事ですね。日本人の手先の細かさ、器用さがこういうところに見られるんですね。

それから、V&A と分離した方の「Science Museum」、ここは、名前はただ、「サイエンス・ミュージアム」。「ロンドン・サイエンス・ミュージアム」とかになっているのではなくて、ただ「科学博物館」です。

ここも残念ながら広くてですね、全部見ていません。象徴的な展示物として、ロケット号という蒸気機関車ですが、これは蒸気機関車を発明したスチーブンソンがつくったやつで、1829 年に作られた実物です。世界最初の旅客鉄道であるところの「リバプール・アンド・マンチェスター鉄道」で使っていた機関車です。

陸上交通のさまざまです。左の一番奥のこれなんですけれども、日本の自動車も並べられていまして、ナンバープレートも付いたまま、なんですね。「多摩 5 る 2660」というナンバーなんです。普通、日本の博物館ですと、自動車をそのまま並べて展示するには、ナンバープレートは付いてないのが普通なんです。つまり、実用品でないということなんです。ナンバープレートが付いてると、走れちゃいますからここにあるやつは当然、ここから走り出すのは無理ですけれども、走れるんじゃないか、とったりしました。

それからこの博物館、ちょっと見にくいかとは思いますが、教育ということを掲げた博物館だけあって、展示室の中もやたらと問いかけの展示があり、はてな (?) のマークが付いたところがたくさんあります。

この二枚は人類の進化に関するところで、どうして、人は特別な一人一人がいるんだろう？人類はみな、アフリカから来たんだろうか？今のところ人類は、ルーシーという女性に始まったということなんですけれども、そうなのかな、ちょっと考えてみてください、と問いかけをする展示がありました。



それからこれは上手く合成できていないんですが、飛行機の実物をちょん切ったものとか、それから大きく輪切りにしたものとか、並んでいます。ちょっと見にくくて、恐縮ですけれども。

飛行機の歴史的なところで、こういうグライダーの模型なんかもあったり、それからいろいろな戦闘機の類たぐいもですね、これは実物ではなく模型でしたけれども、各種展示されています。もっとたくさん実物の飛行機もあったと思います。

それから、リリエントールでしたか、空を飛んでみた人の模型。人類も空を飛ぶというチャレンジを示しているところです。

こういうところなのですが、最近のイギリスの博物館を物語るものとして、1997年、20世紀の終わり頃の時ですけれども、イギリスの文化遺産省から「共通の富～博物館と学習～」という報告が出されています。

博物館に蓄積された資料と、それからその資料の情報を市民共有の財産として位置付ける。そして、博物館というのは、その共有化ということを実現するために、教育をその存在の基盤とし、教育があらゆる活動の本質となる、としていました。現代博物館の目指す方向というのは、博物館は公共サービスの機関であり、その中核に「教育」を置く。活動は多様な社会の幅広い層を包摂ほうせつするものであること、としました。20世紀の終わりにこういう報告書をまとめて、21世紀に向かう博物館の在り方・性格ということを示したわけです。

つまり、宝物だとか、珍しいものを集めて展示してみせるというところだった博物館、その博物館の初めの姿から、博物館というのは地域社会の中でこういうような働きをする。教育をその存在の基盤とし、公共サービスの機関である、教育こそが活動の中核だ、そういう存在であるということが期待されるというふうに示しているわけですね。

この言葉は私自身が博物館というものを考える時にも、やはり基礎となる、基盤となる考え方もあると思います。

現代博物館の最も期待される、果たさなければならない役割というのは、もちろんいろいろな役割がありますが、中でも、教育ということに主眼を置いた活動ということが、最も現代社会では期待されているということが言えるのではないかと思います。

さて、今日のお話はこれで終わりです。いつも終わりはこの「Adomission free」アドミッション フリーでおわるんですけれども、これは先程の「Science Museum」に掲げられているバナーです。

どうもありがとうございます。

ちょっと時間がありますが、何かご質問などありましたら。…よろしいでしょうか？それではこれで、本当に終わりです。どうもありがとうございました。